

春秋戦国時代における青銅礼器の副葬についての一考察

A Study on the Burial of Ritual Bronze Ware in the Spring and Autumn Period and Warring States Period

成城大学文芸学部教授

小澤正人 OZAWA, Masahito

はじめに

中国では新石器時代墓葬が発達し、時代が下るとともにその規模は大きくなり、副葬品も豊富なものとなっていった。すでに殷代には「王墓」と称される大規模な墓葬が発見されるなど、先秦時代において墓葬は十分な発達を遂げており、近年の発掘調査によりその詳細が明らかになりつつある。

このような先秦時代の墓葬において副葬品の中心となったのは青銅器であり、特に祭祀や儀礼といった祭儀に用いられた青銅製の飲食器、すなわち青銅礼器が盛んに副葬された¹⁾。先秦時代の青銅礼器については身分制との関連から多くの論考があり、成果の蓄積がある²⁾。しかし青銅礼器を墓葬に副葬するといった習俗が流行する背景については、これまであまり論じられてこなかった。

そこで本論文では、春秋戦国時代を対象として青銅礼器が副葬されることの意味について考察を加えることを目的としたい。以下、山西省太原市で発掘された金勝村251号墓³⁾を資料として検討を始めることとする。

1. 金勝村251号墓と出土青銅礼器

金勝村251号墓は1987年に太原第一火力発電所に関連した鉄道の拡張工事に伴う事前のボーリ

ング調査で確認された。その後発掘調査が1988年3月から5月にかけて行われ、さらに同年の7月から9月にかけて付属の車馬坑の発掘調査も行われた。年代は春秋時代後期から戦国時代前期とされる⁴⁾。

金勝村251号墓は竪穴木槨墓である(第1図)。墓坑は上面で東西11m、南北9.2m、底部で東西9m、南北6.8mを測る。深さは14mである。槨室は東西長7.2m、南北幅5.2m、高さ3.4mを測る。槨室の周囲は外側を木炭で、内側を礫で埋めている。木棺は三層と推測されている。被葬者は伸展葬で、腕を腹部で組んでいた。歯などの鑑定から、70歳前後の男性と推定されている。また槨室内には4基の木棺が置かれている。人骨から殉葬者は青年女性が2名、青年男性が1名、性別・年齢不明が1名となっている。

この墓葬は未盗掘であり、木漆器の保存は悪かったが、その他の副葬品は埋葬時のままである。副葬品数は3421点に上っている。

青銅礼器は、一般にその機能から煮炊器、盛食器、酒器、水器に分類される。

(1) 煮炊器(第2図)⁵⁾

煮炊器に分類されるのは、鼎、鬲、甗である。

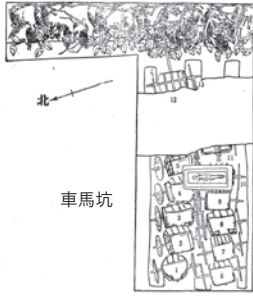
① 鼎

鼎は以下の通り分類される

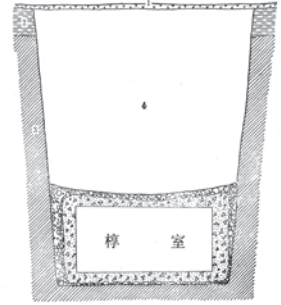
- 1) 無蓋附耳大型鼎

第1図 金勝村251号墓遺構図

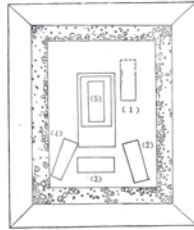
(1) 全体図



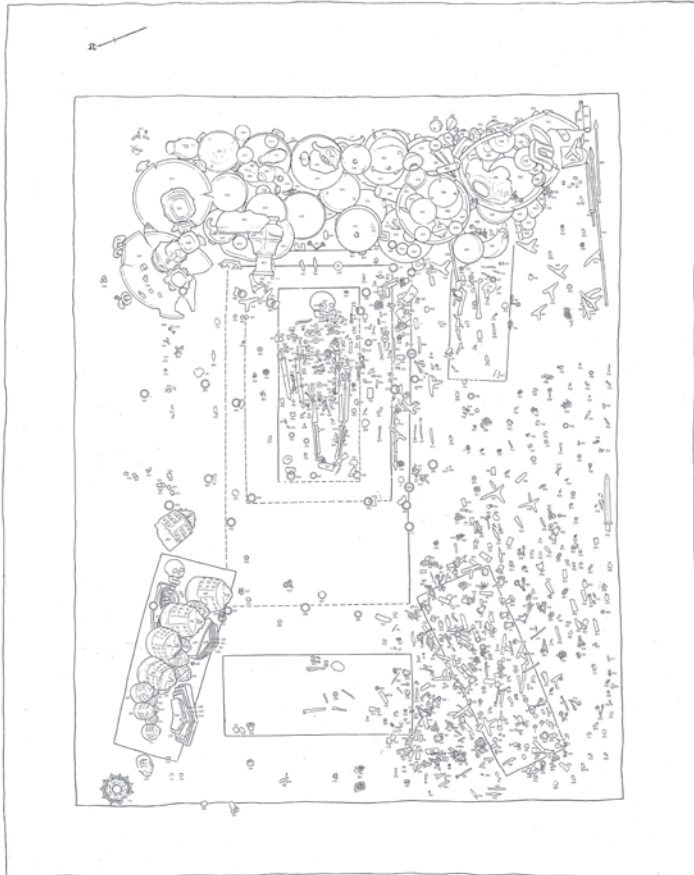
(2) 墓葬断面図



墓葬



(3) 木槨図



0 5m

0 1m

大型、附耳の無蓋鼎で、1点のみが出土している。大きさは口縁径93cm、高さ50cmを測る。

2) 無蓋立耳鼎

やや大型の鼎で5点が出土している。大きさと高さはほぼ同じで、口径は52～54cm、高さは54～56.5cmを測る。底部に煤が付着したのもあり、実用であったことがわかる。2点からは牛骨と豚骨、1点からは牛骨と羊骨が出土しており、副葬時には内部に肉の料理が入れられていたことがわかる。

3) 有蓋附耳円鈕鼎

中型の鼎で7点が出土している。7点は同形で、大きさは漸移的に変化している。口径は45～24.4cm、高さは26.5～45cmを測る。牛骨を出土したものが2点、羊骨、豚骨、牛骨と豚骨を出土したものが各1点出土している。さきの無蓋立耳鼎同様、肉の料理が入れられていたことがわかる。

4) 有蓋鋪首環鈕鼎

中型の鼎で6点が出土している。6点は同形で、大きさは漸移的に変化している。口径は24～31.2cm、高さは22～32.8cmを測る。1点を除き牛骨が出土している。やはり内部には肉の料理が入れられていたことがわかる。

5) 有蓋鋪首牛鈕鼎

中型の鼎で5点が出土している。5点は同形で、大きさは漸移的に変化している。口径は22～30cm、高さは22～30cmを測る。1点から雁の骨が出土しており、肉のスープが入れられていたことがわかる。

6) 有蓋猪鈕鼎

小型の鼎で同形と同じ大きさのもの2点が出土している。口径13cm、高さ11.4cmを測る。

7) 有蓋臥牛鈕鼎

小型の鼎で1点が出土している。口径10.4cm、高さ11.3cmを測る。

② 鬲

大きさと鬲が5点出土している。口径14cm前後、高さ10cm前後を測る。

③ 甗

甗は2点が出土している。1点は鬲型で口径

44.75cm、高さ53.4cmを測る。いま1点は小型の鼎型で、口径22.5cm、高さ29.5cmを測る。

(2) 盛食器 (第4図1～5)

① 簋

同形で同じ大きさのものが4点出土している。口径17cm前後、高さ17cm前後を測る。

② 簠

同形で、同じ大きさのものが2点出土している。口径は35.6cm、高さ20cmを測る。

③ 蓋豆

1) 細蟠螭文蓋豆

同形で、同じ大きさのものが4点出土している。口径は16.7cm、高さ19.8cmを測る。3点から炭化黍が出土している。

2) 粗蟠螭文蓋豆

同形で、同じ大きさのものが4点出土している。口径は15～18cm、高さ17～20cm程度を測る。3点から炭化黍が出土している。

④ 平盤豆

盤部が浅く、無蓋のものである。同形で、同じ大きさのものが4点出土している。口径17cm前後、高さ17cm前後を測る。

⑤ 舟

形状が楕円形の鉢が舟である。2形式が出土している。

1) 細夔龍紋舟

同形で、同じ大きさのものが2点出土している。口径は19cm、高さは8.7cm前後を測る。

2) 細蟠螭文舟

同形で、同じ大きさのものが2点出土している。口径は16cm、高さは8cm前後を測る。1点から黍らしき穀物が出土している。

(3) 酒器 (第4図6～11)

① 方壺

同形で、同じ大きさのものが4点出土している。口径は23cm前後、高さ67cm前後を測る。

② 高足壺

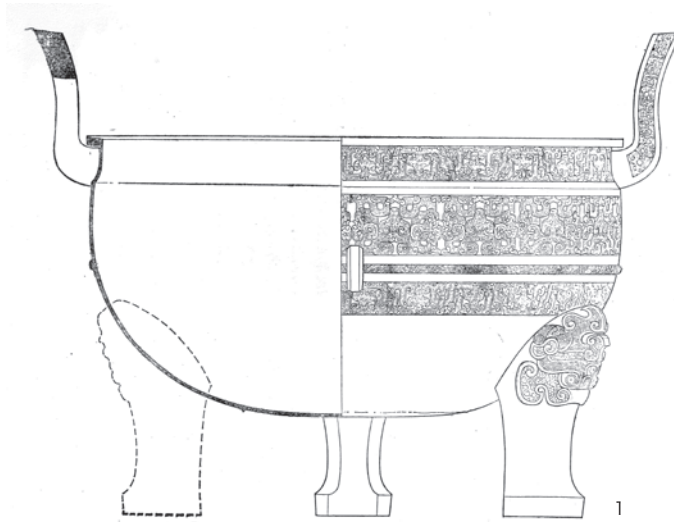
同形で、同じ大きさのものが2点出土している。口径は4cm、高さ28cmを測る。

③ 壘

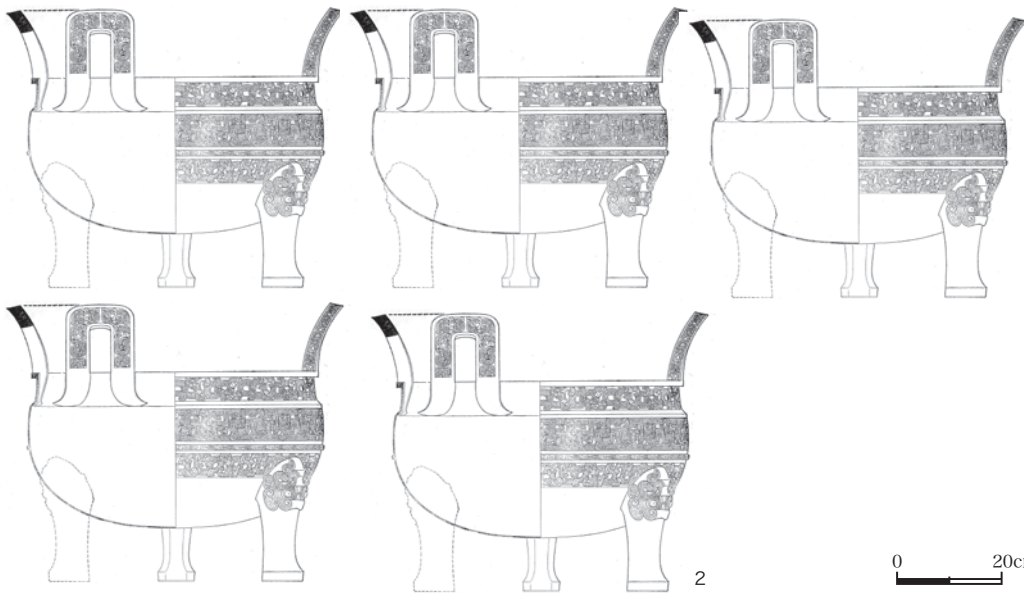
同形で、同じ大きさのものが2点出土している。

第2図 金勝村251号墓出土青銅礼器(1)

無蓋附耳大型鼎



無蓋立耳鼎



口径は17cm前後、高さ36・37cmを測る。

④ 偏壺

1点が出土している。口縁部は方形、胴部は楕円形を呈する。胴下部には円鈕がつく。口径14.3cm、高さ38.3cmを測る。

⑤ 匏壺

1点が出土している。頸部が曲がり、胴部には把手がつく。口径6.7cm、高さ40.8cmを測る。

⑥ 鳥尊

1点が出土している。鳥形で、嘴が流となり、背部に蓋部がある。高さは25cmを測る。

(4) 水器(第5図)

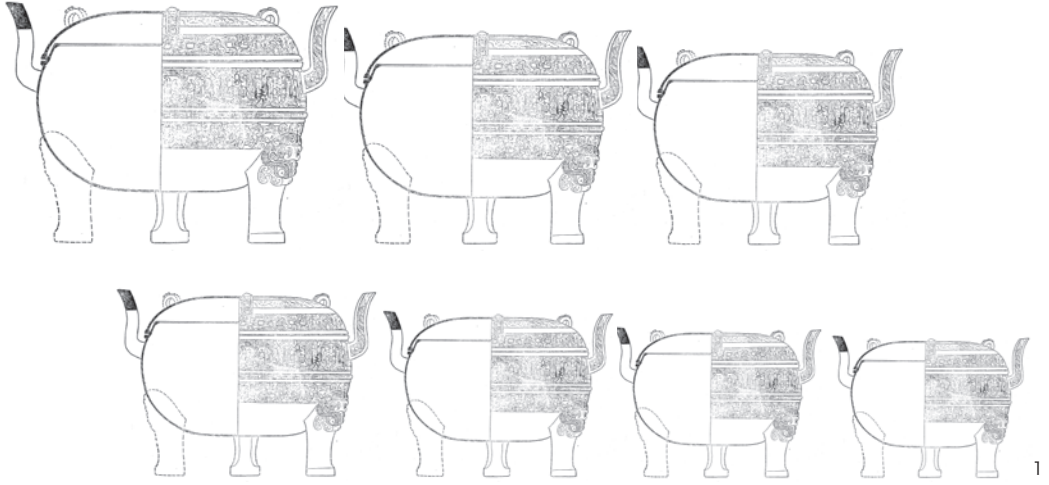
① 匜

1) 虎形匜

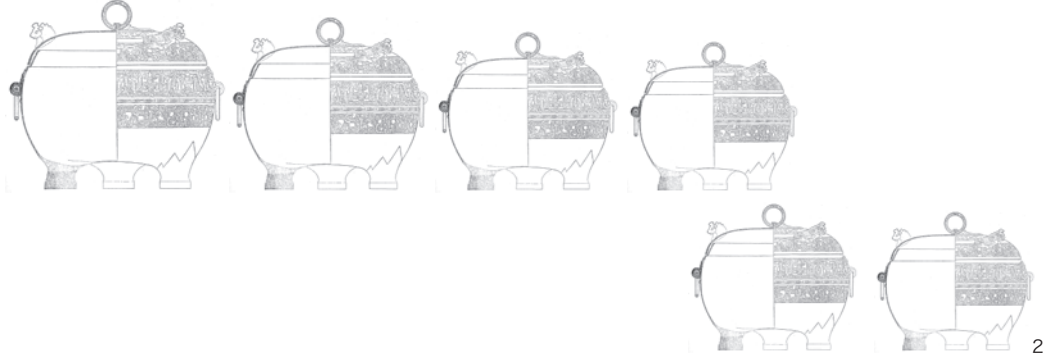
全体が虎形で、口縁下には蟠螭文を施し、把手をもつ。長さ35.8cm、高さ18.8cmを測る。

第3図 金勝村251号墓出土青銅礼器(2)

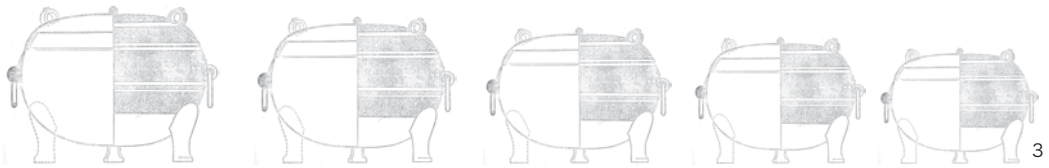
有蓋附耳卣鈕鼎



有蓋鋪首環鈕鼎



有蓋鋪首牛鈕鼎



有蓋猪鈕鼎



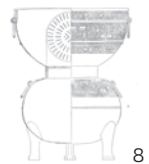
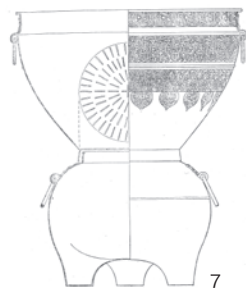
有蓋臥牛鈕鼎



鬲

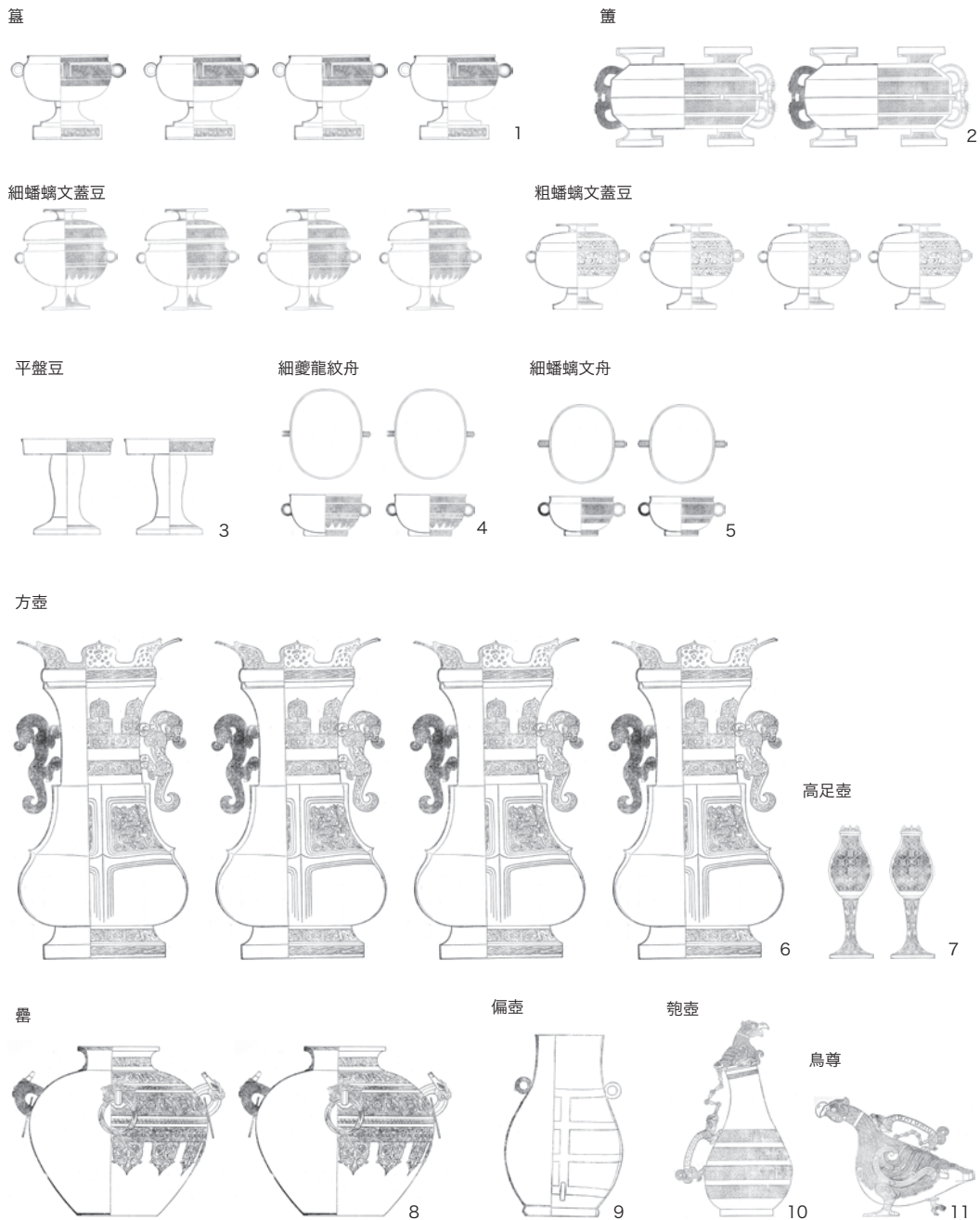


甗



0 20cm

第4図 金勝村251号墓出土青銅礼器(3)



2) 線刻紋匜

形状は楕円形。器表面には紋様はないが、内面には人物・魚・幾何学文などが線刻されている。口径25.4cm、高さ11.2cmを測る。

② 盤

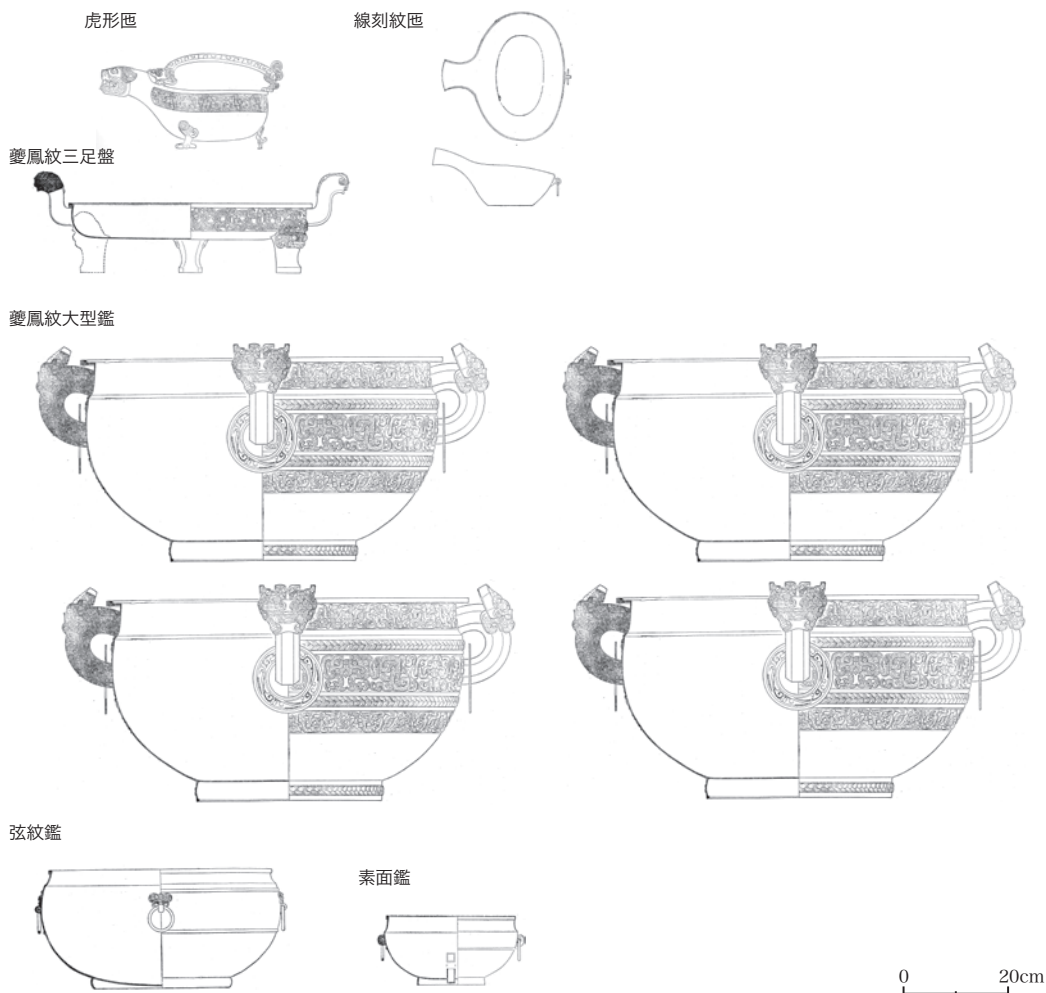
1) 夔鳳紋三足盤

附耳、三足の盤である。表面は夔鳳紋で飾られる。口径48.35cm、高さ19.6cmを測る。

2) 素面盤

破損がひどく全体の形状は不明。体部に環鈕がつく。表面には紋様はない。口径44.6cmを測る。

第5図 金勝村251号墓出土青銅礼器(4)



③ 鑑

1) 夔鳳紋大型鑑

大型の鑑で、同形で同じ大きさのものが4点出土している。表面は夔鳳紋で飾られる。口径70cm前後、高さ42～44cmを測る。出土時には内部に方壺が置かれていた。

2) 弦紋鑑

器表面を弦紋で飾り、4カ所の鋪首がつく。口径45.5cm、高さ23.8cmを測る。

3) 素面鑑

表面には文様がない。口径26.5cm、高さ13.5cmを測る。

2. 出土青銅礼器から想定される祭儀

以上が251号墓から出土した青銅礼器である。青銅礼器が祭儀のための器物であることから、まず出土青銅礼器から想定される祭儀について検討してみたい。

251号墓では青銅礼器に食物が入った状態で出土している。器種別にみると、鼎からは豚・牛・羊・鳥などの骨が、蓋豆や舟からはアワが出土している。また鼎については、底部に煤が付着した例もあり、実際に調理に用いられたと考えられる。

このような青銅礼器から食物が出土する例は多く確認されており、特に鼎から骨が出土する例が

多い。その多くは獣骨であるが、曾侯乙墓からは魚骨が出土している⁶⁾。また 251 号墓で出土した青銅礼器では食物や使用の痕跡が確認できなかった器種でも、他の墓葬ではそれが確認できた例として、以下のようなものがある（カッコ内は出土した墓葬）。

- 鬲：スープの痕跡（中山王墓⁷⁾）。豚の骨・底部に煤（曾侯乙墓）
- 甗：底部に煤（中山王墓）
- 簠：イネやアワなどの穀物（中山王墓）

壺：酒（中山王墓）

以上の事例をまとめると次のようになる。

肉類のスープ（調理と供膳）：鼎・鬲

穀物の供膳；簠・蓋豆・舟

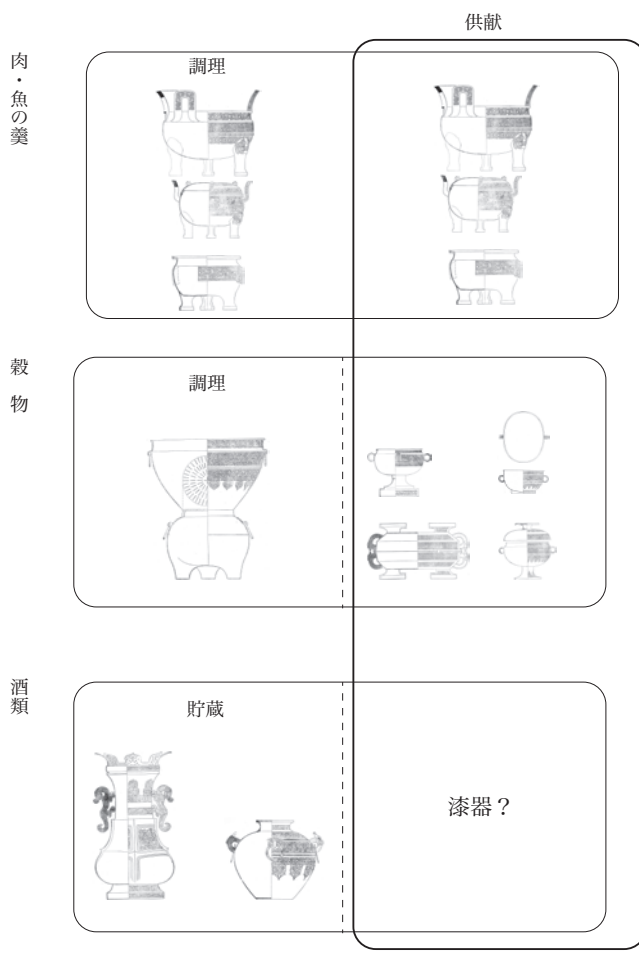
酒類の貯蔵：壺

調理：甗

つまり、実際の出土事例から想定される青銅礼器を使った祭儀とは、肉や魚のスープ、穀物、酒を使った食物祭儀ということになる。

一般に食物祭儀は、対象となる神に食物を供献

第 6 図 青銅礼器を使った祭儀



手洗い



することで進められる。同時に鼎・鬲・甗などで煤が付着した事例があることは、祭儀において実際に調理が行われていたことを示している。つまり春秋戦国時代に行われていた祭儀のプロセスは、食物を調理するところから始められたのであり、そのうえで食物の供献が行われたのである。このようなプロセスをとっていたため、調理のための煮炊器と供献のための盛食器が青銅礼器には含まれていたと考えられる。

出土例から想定される食物は、肉・魚、穀物、酒となる。このうち酒をのぞく肉・魚、穀物の調理は以下ようになる。

- ① 肉・魚：鼎や鬲で調理され、やはり鼎や鬲で供献される
 - ② 穀物：甗で調理され、簋や蓋豆といった盛食器で供献される
- ということになる。

この他酒類については青銅礼器としては壺類のみである。ただし実際の供献では漆器などを使って分配されたと考えられる。また以上のような食物祭儀を進めるための手洗いの道具として、水器がある。

以上の関係をまとめたものが第6図である。

つまり、春秋戦国時代の祭儀の基本は、肉や魚のスープ、穀物、酒の供献を基本とするものであり、供膳に到るプロセス、すなわちスープや穀物の調理、酒壺からの分配、手洗いなどを含むものであった。そして祭儀のプロセスで必要とされる道具は、青銅器が基本とされたのである。

3. 青銅礼器副葬の意義

以上、出土した青銅礼器からその背景にある春秋戦国時代の祭儀の復元を試みた。このことをふまえて、青銅礼器が副葬される意味について考えてみたい。

春秋戦国時代の墓葬の主要な副葬品が青銅礼器であることはすでに述べた。墓葬の副葬品は造墓者が被葬者の利益となると判断して被葬者とともに埋葬する器物である。したがって青銅礼器が副葬品の中心をなすことは、造墓者にとっては青銅

礼器が被葬者にとって重要な器物であったと認識されていたことを表している。青銅礼器が実際に行われていた祭儀の道具であることからすれば、造墓者が青銅礼器を重視したのは、青銅礼器を使った祭儀を重視していたことに他ならない。

春秋戦国時代の墓葬では、大型の墓葬ほど副葬される青銅礼器の器種が多く、点数も多くなる傾向が見られる。このことは大型墓の被葬者が、一般的な墓葬の被葬者よりも複雑かつ規模の大きな祭儀を行っていたことを反映している。大型の墓葬の被葬者は社会の上位層が想定されることから、春秋戦国時代では社会の上位階層ほど複雑かつ大規模な祭儀を行っていたことになる。このことと古代社会において祭儀が個人的な行為に留まらずその主宰者の地位を参加者に知らしめるといふ社会的な意義を具えていたことを考えあわせるならば、社会の上位層は自らの身分を表現するためには、盛大な祭儀を行う必要があったとすることができる。

つまり社会的な身分を祭儀によって視覚的に表象していた春秋戦国時代において、社会的身分の上位者は盛大な祭祀を行うことで、自らの身分を表現する必要があった。そのため、社会の上位層ほど多種で多量の青銅礼器を必要としたのである。逆に言えば、所有する青銅礼器には、その人物の社会的な身分が反映されることになる。

春秋戦国時代の墓葬において祭儀に使われた青銅礼器が副葬されたのは、このような現実の社会における祭儀と青銅礼器の意味が、そのまま墓葬に持ち込まれたことによるためと考えられる。

中国では新石器時代から死者を墓葬に安置し、同時に器物を副葬する習俗が見られた。その規模は時代とともに大型化し、副葬品も多種多様で点数も増加していった。その背景には人間は死により消滅、あるいは生まれ変わり別の存在になるのではなく、死後も何らかの形で継続して存在するといった概念があったと考えられる。そのため墓葬は単なる遺体の安置施設なのではなく、造墓者には墓葬を被葬者の生前の社会的な身分に相応しい施設とすることが求められた。春秋戦国時代では身分の表現として祭儀が重視されていたため、

第7図 馬王堆1号漢墓帛画



それを実施するための道具である青銅礼器の副葬は欠かせないものとなったのである。

同時に、青銅礼器に本来食物が盛られていたことは、埋葬時に青銅礼器を使った祭儀が行われていたことを示唆している。このような埋葬時の祭儀は、死者の昇仙を画いた馬王堆1号墓出土帛画にも画かれている。したがって青銅礼器に盛られた食物は、被葬者が地下での生活の中で食するための貯蔵品ではなかったと考えられる。

つまり春秋戦国時代の青銅礼器は、被葬者の社会的身分を表象する威信材として副葬されたのであり、そこに盛られた食物は最後に行われた祭儀で供用されたものと考えられるのである。

おわりに

以上、春秋戦国時代の青銅礼器副葬の意味を検討してきた。最後に春秋戦国時代の墓制との関連について考えてみたい。

金勝村251号墓からは青銅礼器の他には武器・玉器・車馬具などが出土している。これらはいずれも死者の生前の社会的な身分を表象する器物と考えられる。このようにみると、春秋戦国時代の墓葬の副葬品には被葬者の生前の社会的な身分を表象するといった性格が強いことがわかる。

これに対して、秦漢時代の墓葬では食物や日用品が副葬品の中心となっており、墓葬が被葬者が地下で生活を送る場としての性格を強めることが推測される。このような墓制の転換の過程を明らかにすることが今後の課題である。

注

- 1) 先秦時代の墓葬については以下の書籍を参照。
中国社会科学院考古研究所編『中国考古学 两周卷』（考古学専刊甲種第30号、2004年、中国社会科学出版社北京）。
- 2) 代表的なものとして以下のものを挙げておく。
俞偉超・高明「周代用鼎制度研究」（俞偉超『先秦兩漢考古学論集』所収、1985年、文物出版社北京）。
岡村秀典『中国古代王権と祭祀』（2005年、学生社、東京）。
小南一郎『古代中国天命と青銅器』（2006年、京都大学学術出版会 京都）。
- 3) 山西省考古研究所他『太原晋國趙卿墓』（1996年、文物出版社北京）。
- 4) 金勝村251号墓の年代については異なる意見があり、現在でも議論が続いている。ここではおおまかな年代観を示すに留める。この問題については以下の論考が参考となる。
路国権「論太原金勝村1988M251銅器群の年代及相關問題」（『考古與文物』2016年第1期）。
- 5) 第2図から第6図の青銅礼器のうち、同形のものについては報告書では代表的な1点のみを掲載し、全ての青銅器の実測図を掲載していない。このため複数の青銅器が出土した器種については、筆者がデータに基づき全体像がわかるように図を作成した。
- 6) 湖北省博物館編『曾侯乙墓』（1989年、文物出版社北京）。
- 7) 河北省文物研究所編『響墓：戦国中山国国王之墓』（1996年、文物出版社北京）。